



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	白石詞研究 : 清代から民国期にかけての詞論を中心として
Author(s)	張, 江林
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16666号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16666
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98276
Type	doctoral thesis
File Information	Jianglin_Zhang_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：張 江 林

学位論文題名

白石詞研究

—清代から民国期にかけての詞論を中心として—

一 問題意識

本研究は、南宋の詞人姜夔（字は堯章、号は白石道人）を対象とし、その詞作品（白石詞とも言う）および清代から中華民国期にかけての後世における受容と評価を主題とするものである。姜夔は、宋词史において独自の美学を確立した人物として評価され、その風格は「清空」「騷雅」（宋・張炎『詞源』）、「典麗」「醇雅」（清・朱彝尊、汪森『詞綜』）、「有至情」「耐尋味」（清・謝章铤『賭棋山莊詞話』）、「清虛騷雅」（清・陳廷焯『詞則』）、「流暢」（清・沈祥龍『論詞隨筆』）などの語によって特徴づけられてきた。彼の詞は、清新かつ静謐な情趣、精緻な音律感覚、そして象徴性の深いイメージを備えており、南宋の詞壇における独特な存在として位置づけられる。その影響は宋代にとどまらず、清代から民国期にかけての詞派や文学評論家の間にも広く及んでいる。

しかし、姜夔研究の現状を概観すると、幾つかの問題点が指摘できる。第一に、従来の研究は、特定の時代や詞派の評価、あるいは限られた評論家の主張に焦点を当てる傾向が強く、姜夔とその作品が時代を超えてどのように受容され、評価されてきたのかを長期的視野で体系的に整理した研究は少ない。第二に、後世における評価と姜夔の作品の表現的特質とを関連づけて論じる試みが十分ではなく、受容史と作品分析とが分けたまま扱われる場合が多い。その結果、評価の変遷を踏まえた上で作品の表現構造を解明するという視点が欠けていると考えられる。

先行研究は大きく二つの方向に分けられる。一つは、詞史全体の流れの中で姜夔を位置づけ、その詞風を「清空」「騷雅」などの美的範疇に収めるものである。この系統の研究は、特に清代の浙西詞派に通じる評価の枠組みを踏まえており、白石詞の格調や典型性を強調する傾向が強い。しかし、こうした評価は多くの場合、総括的であり、彼の詞に見られる表現の多面性や時代的な変容を捉えきれていないという限界がある。一方、もう一つの方向は、宋词において個別作品や特定のテーマに着目し、書き方や主題などを比較し分析するものである。この場合、作品テキストの分析は深く行われるが、それが後世の評価とどう関係するのかについては十分に論じられず、歴史的

脈を離れた印象論にとどまることが少なくない。

このような研究状況は、白石詞研究において二つの課題を提示する。一つは、後世における姜夔評価を長期的かつ体系的に整理し、その変遷と背景を明確にすることである。具体的には、清初から民国期に至るまでの詞派や評論家の議論を網羅的に収集し、時代的背景・詞学的潮流・論者の立場などを照らし合わせながら分析する必要がある。もう一つは、そのように整理された評価史の知見を踏まえた上で、白石詞の風格や表現特徴がどのように構築されているのかを検討することである。この二つの方面の作業は立体的な姜夔像の再構築を可能にするものである。加えて、白石詞の研究意義は、単なる一詞人の作風解明にとどまらない。姜夔の詞は、南宋末期という歴史的転換期において、政治的・社会的動揺の中で形成された独自の美学を体現している。また、その後の清代詞壇においても重要な参照となり、文学的規範や美意識の形成に影響を与えた。特に、浙西詞派や常州詞派などでは、白石詞を音律的規範や典雅の象徴として位置づける一方で、過度の技巧や感情の抑制を批判する見解も見られる。このように、彼の詞は賞賛と批判の両者を受けつつ、時代ごとに異なる受容を経てきた点に、文学史上の重要性が認められる。

二 研究方法

本論は、清初から民国期に約三百年にわたる姜夔（白石道人）の評価と受容の変遷を解明するため、史料調査と作品分析を融合した方法論を採用する。使用資料は二系統に大別される。第一に、後世の文学者・評論家による詞話・詩話・文学評論・詞集序跋・文集・書簡等、姜夔に直接・間接的に言及する文献群である。これらは清代浙西詞派・常州詞派・地方詞壇・近代批評家など多様な立場を反映し、評価語や批評視点に時代的・地域的特徴が顕著である。これらの史料を通じて、時代や詞派ごとの評価語や批評の枠組みを抽出し、その特徴と変遷を明らかにする。また、本研究における「評価」という語は、単なる価値判断にとどまらず、美的概念・表現技法などへの言及を含む広義の批評的言説を指すものと定義する。第二に、姜夔自身の詞作品であり、既存の校訂本・影印本・点校本を参照しつつ、必要に応じて異文や版本差異も検討対象とする。

史料収集では、清初から民国期に刊行された詞話・詩話類を網羅的に調査し、姜夔言及箇所を抽出した。これらには特定作品の評釈、詞風の分析および音律などが含まれ、各時代の批評的関心を映す。また詞集、序跋や文人の書簡においても、姜夔詞への印象や位置づけが示され、詞話とは異なる評価視点を提供する。近代期の文学雑誌なども対象とし、伝統的詞学から近代文学批評への移行過程における評価変容を多角的に把握する。

分析方法では、収集した評価を時代・詞派・評論家別に整理し、特徴と相互関係を解明する。単なる発言者の立場確認にとどまらず、評価語・批評の枠組み・言及作品・他詞人との比較等を総合的に分析する。特に「清」「冷」「醇」「雅」等の美的形容や「工」「巧」「疎」「隠」等の技法評が、時代・詞派によって如何に主張されるかを比較し、語彙選択と時代傾向の関連性を明らかにする。これにより、同一の姜夔像が時代や文人集団によって異なる解釈・価値づけを受ける過程を具体的に描出する。

理論的基盤として文学受容史の視座を据え、作品解釈が読者層・文化的背景によって変容する過程を分析する。受容を単なる評価変化としてではなく、文化的記憶形成や文学的規範再編と連動する動態的過程として捉える。テキスト分析では詩学・修辞学の用語体系を援用し、作品に現れる意象・構造・修辞技法を精査することで、評価史との対応関係を検証する。

分析視点は史的評価の整理から導出した三つの軸に設定する。第一に比喻・連想・換喻・象徴等の修辞手法を通じ、情景と情感が間接的且つ緊密に融合する機序を解明する。第二に寒色系イメージ及び「冷」の美学的表現が、気候・季節感を超え精神的距離感や情感抑制を如何に体現するかを分析する。第三に「梅花」をめぐる表現と主題に着目し、反復詠唱される梅花の意象が人格理想・精神的象徴として機能する構造を解明する。これらの視点は後世の評価語・批評の枠組みと直結し、史的評価と作品表現を往還する分析を可能とする。

なお、本研究は史料分析と作品解読の比重を均衡させて推進する。史料検討のみでは評価の根拠を十分に説明できず、作品分析のみでは後世における受容動態を把握し得ない。両者を往復させる方法論により、姜夔詞の文学史的位置づけを立体的に構築することを目指す。

三 研究内容

本論の第一章では、宋代および清代における清雅詞、主に姜夔の作品の受容状況とその背景について考察した。まず、清雅詞派を代表する白石詞について、その特色、思想内容、叙情の方法を分析し、作者の人格と作品の関係を検討した。次に、白石詞の後世における発展と受容の状況を概観した。さらに、宋代から清代にかけての姜夔関連文献の量的変化を整理し、後世の文人がどのように白石詞を論じ、継承し、発展させていったかを考察した。加えて、白石詞が清代に広く受容され影響力を持った背景として、南宋と清代に共通する高雅な審美観の重視、宋代哲学の発展、儒・理・道・仏の思想的融合、清代経学者による詞研究と創作活動の四つの要因を指摘した。

第二章では、特に晩清から民国期にかけての白石詞の選録・収録状況や詞論におけ

る受容について整理し、時代背景や詞壇の動向と照らし合わせて論じた。清初には、浙西詞派の朱彝尊が白石詞を「雅正」と評価し、明末以来衰退していた詞風の刷新を試みた。朱は儒家の価値観に基づき、白石詞を整った端正な作品として位置づけ、弱々しい当時の詞風に批判的な姿勢を示した。しかし、清代中期以降は浙西詞派末流の形式美重視の傾向が強まり、内容が希薄な詞作が増えたことで、白石詞は一時的に詞壇での評価対象から外れることとなった。状況が大きく変化するのは晩清から民国期にかけてである。この時期、国内外で政治的・社会的危機感が高まる中、詞人たちは家國への思いを詞に託す表現を模索した。常州詞派の張惠言や周濟は、辛棄疾のように直截な家國情懷を表す詞を評価する一方で、白石詞の内省的で隱喩的な表現にも改めて注目した。特に宋翔鳳は、北宋・南宋の愛國詞人と同様に、白石詞を國家への憂いを込めた作品として高く評価しており、清代における白石詞の再評価の様子を示している。また、晩清期には多くの詞人が白石詞の形式や詞調を模倣した。鄭文焯をはじめとする詞人は、白石詞特有の「自度曲」の詞調を和韻や仿作で表現しており、晩清における白石詞の影響力の大きさがうかがえる。白石詞は単なる文人趣味の対象ではなく、國家の衰退や現実への複雑な情感を表現する手段として受容されていたのである。このように、清代における白石詞の受容の変遷は、好悪の問題にとどまらず、時代の価値観や政治状況と密接に関わっていたことが確認される。清初の浙西詞派による形式美の尊重から、晩清の常州詞派による國家への思いの表現まで、白石詞はその受容の仕方を変化させつつ、清代を通して多くの文人に影響を与えてきたのである。

民国期には、伝統文学の再評価をめぐる活発な論争が展開された。朱祖謀や況周頤の系譜を継ぐ研究者たちは、清雅詞の美意識を重視し、音楽性や作風を古典韻文における美の完成形と位置づけ、急速な社会変動の中で失われつつある文芸的伝統の継承を主張した。これに対して、王国維の「境界説」や胡適の白話文運動、さらに西洋文学の影響を受けた研究者は、詞の価値を形式美ではなく内面的情感の表現力に求め、過度に様式化された詞風を時代遅れと批判し、現実を映す新たな詞風の創造を主張した。

以上の議論から、清代から民国期にかけての白石詞に関する論述と評価の変遷を整理すると、時代や詞派によって評価の視点は異なるものの、白石詞の特質として反復的に認められる共通点がある。それは「清雅」「幽冷」といった美的特質の一貫性である。清初の浙西詞派は、姜夔詞の音律の厳正さや構成の端正さを高く評価し、「清空」「騷雅」といった概念で理論化した。これにより、白石詞は詞の規範として位置づけられた。一方、清代末期の常州詞派や民国期の学者は、単なる称賛に留まらず、「過度の技巧」「情感の希薄化」といった批判的視点も示し、感情表出に関する理念の相違を浮き彫りにした。さらに、民国期の文学評論家らは、西洋文学理論や近代批評眼を

背景に、白石詞を新たな枠組みで再評価した。

第一・二章を通じて明らかなのは、姜夔評価が時代ごとの詞学観や文化的背景に応じて再解釈されてきた事実である。清初から清代中期では規範性と格調重視の文脈で情感の深みが焦点となり、清末から民国期には近代化の中で技巧性と修辞表現の関係が再考された。こうした評価の変遷が白石詞の多面的理解の基盤を形成し、後の作品分析における視点設定の理論的根拠を構成する。これらを踏まえ、本論では姜夔の風格を分析するため、三つの視点を設定した。第一は比喻・換喻・連想・象徴などの修辞手法であり、自然物や具体的対象を媒介として抽象的情感を間接的に表現する技法が顕著である。第二は寒色系のイメージや「冷」の美学的表現であり、単なる気温や季節感ではなく、情感の抑制、静謐な格調、世俗との距離感といった精神性を象徴的に表現する。第三は「梅花」に関する表現と主題であり、梅花は白石詞において繰り返し詠まれる重要なイメージで、孤高の人格表現や理想郷の象徴として機能すると同時に、詞人の美意識と人生観を凝縮する役割を担っている。

第三章では姜夔の代表的詠物詞「齊天樂 蟋蟀」を精読し、表現手法と重層的意味を析出するとともに、清代における白石詞の詠物詞規範化の背景を考察する。テキスト分析により、蟋蟀の鳴き声が個人の郷愁・漂泊感を喚起するのみならず、亡国・乱世という時代的含意を帯びる二重性を解明する。具体的には詞序と本文を詳細解釈し、他詞人作品との比較を通じて姜夔詠物詞の特質と後世の継承を論じる。

まずは詞の序文に着目する。序文が会飲の席でのコオロギの鳴き声を創作動機とし、夜の酒宴と外界の物音という場を設定することで、本文への情緒的導入を果たす点を指摘する。テキスト分析ではコオロギを直接描写せず換喻・象徴等の手法を使い、各景物描写が全篇を貫く統一的情緒を形成する構造を明らかにする。表現技法の核心は四つに整理される。第一に側面的描写から主題への漸進的構成、第二に詞人の情緒とイメージの音・色などの交錯的配置、第三にコオロギの声・砧の音・機杼の音・琴の響きなどの表現、第四に露・苔・灯影等の視覚および触覚的細部の統合である。これらの技法は単なる昆虫詠を超え、作者の内面と時代意識を重層化し「含蓄」と「余韻」を創出する核心として機能する。さらに「白石道人詩説」の主張を理論的基盤として検証し、本作がその文学主張を具現化した典型であることを反映する。比較考察では清代凌廷堪「秋宵吟 蟋蟀」等の同題材作品と対照した。凌作が直接的・情景的描写を主軸とするのに対し、姜夔は情感の基調線を先行設定し、物象をその媒介として機能させる点に特徴が認められる。また姜夔の「齊天樂 蟋蟀」は清代以降の詞選・詞話に頻出し、清雅詞派の理想的作例として参照された。白石詞の「含蓄」と「清雅」という特徴が清代詞学の規範と合致した結果、詞人による模範化が促進され、作品の文学

的地位が確立された過程が見える。

白石詞は、よく「冷」と評されてきた。姜夔の詞は、寒色系の描写を基調とし、「冷」表現を通じて超脱した空間性を生み出す点に特色がある。従来研究では姜夔の詞風が論じられてきたが、「冷」表現そのものの多様な機能に関する考察は十分でなかった。第四章は、白石詞における「冷」表現の役割を中心に、比喻や象徴を含む修辞手法と感覚的イメージの運用を分析する。その結果、「冷」表現は哀愁や寂しい感じに限らず、積極的・消極的・中立的な感情を多層的に担い、景物と情感のとけ合いを媒介することが明らかとなった。また、民国期の文学者である錢鍾書の「二つの取っ手」理論を援用し、イメージの多義的な働きを解釈することで、姜夔の詞境に内在する含蓄を再評価した。

さらに、白石詞における「冷」表現は、景物描写を通じて詞人の人格表現や人生観とも結びついており、孤高・清節の美学を体現するものとなっている。これにより、「無情」とも評された白石詞が、むしろ繊細で多面的な感情表現を孕んでいることが示された。本章は、白石詞の美学的特質を「冷」表現の分析から再定位する試みであり、詞学史上における姜夔の独自性を解明するとともに、伝統文学における表現の受容と変遷を理解する新たな視座を提供するものである。

第五章では、姜夔の梅花詞を多角的に分析する。まず、梅花を題材とした作品における詳細な景物描写と感情表現の融合を検討し、作者が梅花を通じて自己の思想や心情を託すと同時に、当時の社会状況や文人意識を映し出していた点を明らかにする。次に、視覚・聴覚・嗅覚といった複合的な感覚表現（「通感」「聯覚」「移覚」などと呼ばれる手法）に注目し、読者に与える情緒的効果と作品の文学的価値の向上を確認する。さらに、景物描写や典故の運用、擬人法などを通じて、直接的な感情吐露を避け、婉曲かつ深みのある表現を実現している点を指摘する。加えて、他の詞人による梅花作品との比較を通じ、白石詞の独自性を明確化する。姜夔は梅花にある特定の象徴を与えるのではなく、作品ごとに多様なイメージを媒介として自己の内面世界を展開することを特徴とする。すなわち彼は中国古典文学の伝統を継承しつつ、独自の感性と表現技法によって新たな境地を切り拓いたと評価できる。また、梅花詞を含む白石詞は、清初から民国期にかけて多方面に影響を及ぼし続けた。その受容の変遷は単なる文人趣味の領域を超え、時代の価値観や政治状況と密接に関連する。清初の形式重視的な評価から、清末民初における故郷や国家への感情的表出へと展開する過程において、白石詞は詞壇における重要な規範的役割を果たしたのである。

総じて、本論は白石詞の表現風格とその受容史を併せて考察し、姜夔詞の美学的特質と歴史的意義を改めて位置づける試みである。対象を白石詞に限定したため一定の制約はあるものの、テキストの細部と受容の変遷を通じて分析を行うことで、従来の研究とは異なる視角を示すことを目的とした。